

[わたしのこの一冊]

## 「人間と芝居の危険な関係」

佐藤 実枝

筆者はここ数十年マリヴォー劇に専念したが、かつてはミユッセの『喜劇と格言劇』から遡って、彼に影響を与えた Carmontelle や十八世紀後半の<sup>テアトロ・マニ</sup>芝居熱に熱中した時期もある。最近、この頃の筆者の記憶を一新させる事件があった。六月末に日本で連続講演をされたパリ第四大学の Pierre Franz 氏との、思いがけない再会である。筆者が Chantilly 城 (Musée Condé) まで足を伸ばしてカルモンテルの資料収集に奔走していた頃、第四大学の M<sup>me</sup> Rougement のご紹介で専門家のフランツ氏を訪ねたのだった。今回二十六年ぶりの再会だったが、「芝居熱の研究はその後フランスでも見るべき進展がないので、マリヴォーのあとはぜひこちらも続けて欲しい」とのこと。同意はしたものの筆者の現状では心許ない約束ではある。せめてこの機会に、当時よく利用した文献の一冊を想起しながら、貴族社会の<sup>テアトロ・マニ</sup>芝居熱現象についていささか私見も述べたいと思う。問題の本は二十世紀後半に出版されたおそらく唯一の関連文献で、Jean-Hervé Donnard の Le théâtre de Carmontelle (Armand Colin) 1967、特に名著でも大著でもないが文献目録は一応完備している。「王侯貴族の娯楽」と軽視されてきたジャンルが、C.N.R.S の協力で研究対象になったのはフランスでもこれが最初だった。

カルモンテルはオルレアン家に仕えて、公の催す私的公演を企画・催行した作家兼プロデューサー。(現代から見れば)市中劇場では不可能な既成概念の拡大、観客参加をそそる構造、ひいては演劇自体への問いも引き出しかねない形式で、百作ほどの<sup>プロヴェルブ</sup>格言劇を上演した。彼をいちばん悩ましたのは、台詞を覚える忍耐力のない貴族たちが多くことで、いかに滑稽に陥らせずに台詞を言わせるかが問題だった。かつてマリヴォーがサロンとイタリア人劇団から学んだように、カルモンテルもサロンの日常的会話を土台とした即興を薦める。<sup>プロヴェルブ</sup>「格言」は即興の脱線を防ぐ重要な枠組みでもあったとドナールは言う。作品の題材は当時のフランス人の生活に広く取材し、リアルで簡素なタッチがたちまち人気を集めた。彼は画才豊かで、格言劇に挿絵をつけたり、ピアノを弾く *Enfant Mozart* や文人 Grimm など同時代人の夥しい肖像画を残したが、ここにも読み取れる現実への幅広い好奇心と細心な観察が彼の創作の基本だった。しかしあくまでお抱え作家の分は守り、芸術的完成よりは奉仕精神に徹し、生前出版した百三

作の格言劇も「即興のセリフのほんの一例」とつつましい。即興が難しい場合に備えた台詞で、簡潔で覚え易くアドリブを予想しているのが、貴族たちは気楽にエスプリを發揮、これが一層参加への意欲を掻き立てた。

ドナールは「サロン劇を成立させる具体的空間」を示す章を設けているが、ここにも参加をそそる構造がある。庭園・森などの戸外や、大貴族の私立劇場を思わせる舞台(大階段やロージュなど)はむしろ少数で、約半数は日々客が出入りするサロンや広間が舞台となった。登場・退場のためのドアが1つか2つあればその一角が舞台となるので、利便性、経済性から愛好されたが、客席と舞台を区別する明確な線引きはない。演技者と客席には現代人が求める以上の一体感や交歓があった。例えば意中の人が恋人役になれば告白の絶好のチャンスとなり、恥をかきそうなら虚構に逃げ込むというように、芝居は彼らにとって生活の様式だったから、台詞はときに肉声となり、ときにエスプリの<sup>あかし</sup>証となった。しかし、自己を晒しがちないわゆる「口立て芝居」は当然危険も伴う。芝居が麻薬となって、酔えば酔うほど彼らの現実認識を麻痺させた面もあろう。当時流行の「カフェ遊び」の〈劇化〉はさらに特異な形態で、観客と役者が混在し、たわいない筋立てでもしばしば観客を劇中に巻き込むようにたくらまれていた。邸の従僕たちはボーイ姿で給仕し、観客も筋書きに合う衣装で夜食を取りながら観劇する。虚構のなかに敢えて生活行為(飲食)を取り込むほど、両者を突き混ぜようとする偏執は強い。虚構にはイリュージョンを求めず、逆に不安な現実をイリュージョン化したいのではと思えてくる。(大革命前夜の貴族たちは、高まる敵意の中でも特権に執着した。しかし当然不安はある。王妃でさえ公式の場を避け、プチ・トリアノンの小劇場で芝居に埋没した)。カルモンテルは第3階級の役を数多く描いたが、オルレアン公も特に農民役を好んだという。百一番目の格言劇『2人の田舎役者』を例に取るなら「貴族に化けて棒叩きにあう役者を、本物の貴族が演ずる」という倒錯的構造がある。特権階級の悪や滑稽をみずから演じて楽しむ自虐的遊戯——カイヨワは『遊びと人間』の中で、遊びの本質には社会的役割からの、仮面による脱出・解放があるというが、彼らの変身願望にはより深い闇があったに違いない。